

追善 荻原義吉を偲ぶ

一杯飲んで酔いが回ると、義吉なんて芸者みたいな名前をつけられて、とよくこぼした、誰に付けられたかという寛治さんであるという、父親豊次は子供8人いたが、自分が付けた子供の名は一人もないという、みんな寛治さんと潔さんが付けたらしい。

我が家は二つの名前がある子が殆んどで、戸籍上の名は其の時役場に届けに行った人が付けた名前であり、小学校入学通知で本当の名前が始めて判明し、何時も呼んで居る名前と違うのに驚いたり戸惑ったりしたという。何時も家族が呼んでいた名が潔の付けた名で、寛治が其のとき役場に届けに行き自分の付けた名に変えてあった。寛治が付けてくれて其の名だと思っていると、潔が役場に届けに行き自分の付けた違う名にしてある。文学者と、易学者(寛治・潔)の、名付け親合戦、それぞれ相手を気づかっていたことだったと思うが、兎に角変わった家系であった。

・祖父潔(能均次男)、祖母夏(借宿・行田家より)子供がなく潔の弟豊次と、なつの姪とらの、を両養子とす

義吉は豊次、とらの、の長男として生まれるも、乳離れ後(三歳)頃より干が滝の祖父母の基で育てられる。…目に入れても痛くないという言葉があるが、荻原の惣領(長男坊)ということで殊の外可愛いがられ大事に育てられた。祖母なつ、を癌で亡くしその後望月から後妻きみ、を迎える事となるが、なつ、への思慕は生涯絶ちがたく辛く淋しい思いをした。命日には実家の仏壇に必ずお参りにきていた。

今回の葬儀の葬儀委員長の大任を果たして下さった、上原さん—この方は新軽の方で町の権威ある消防団長、…町の重要会議や行事に出席されておりました事をお見かけしておりました。—何故この方が…?…故人との係わりは仲人親との事で、引き受け下さったと聞いておりました。

偶々火葬場で隣席し、親しくお話を伺う機会を得たわけですが、そこで思いもかけ話ないお話を覗いた訳であります。この方の社会人としての第一歩は、就業先が観翠楼であったとのことでした。…なんと観翠楼…奇遇の縁とでも申しましょうか、故人にとって揺り籠(ゆりかご)の地であったのが 観翠楼でした。

忘れてはならないゆかりの地に、関係のあった方が、個人の人生の最後を飾って下さるなんて、神のお引き合わせかとさえ感じさせられました。時代の流れは観翠楼なんても知らない人もあり、今は其の跡形も無く、そんな所あったのかと、忘

れ去られようとしているところですが、義吉の生い立ち、荻原の歴史を語るには落とす事のできない場所である。

観翠楼は、千が滝発祥の地。延いて言えば今の国土、西武のリゾート産業発祥の地である、と言っても敢えて過言ではないかとおもう。

荻原と先代堤氏との係わりは荻原の家系、寛治の項で述べてあるが(一介の書生姿の、先代堤康次郎氏が沓掛駅頭に立ち、浅間裾野の広野沓掛区有地に目を付け、買いたいと願い出た、三万と言う大金である、もし詐欺にでもあったらと、区民の信用を得られず難航した折、荻原寛治の助言と仲介により成就した)、**寛治あっての千が滝**、兎に角かかわりは深かった、そこで寛治の代わりに**弟の潔が地元人としては一番最初に会社人**となった。当初は会社名もなく千が滝遊園地と言った(当初は、人足の手配等していたが柳澤氏—後の柳澤建設—toに任せる)。

先ず堤さんは千が滝開発の**前進基地**、根拠地、として作ったのが観翠楼で、山の中の一軒家、其処へ潔夫婦が住み込むこととなる訳である(千が滝との名称も荻原の先祖が徳川時代から深明治の初めまで、**修験者**としてあの滝に打たれて修行した、歴史的関係の深かった千が滝、其の名とするよう提言したものであり、平安時代の官牧長倉の牧から来ている広大な、大字長倉、の中の、字坂下とか、字獅岩と呼ぶのが、中区近辺の当時からの戸籍上の地名である)。

冬期間は寒さと雪で何もできない、雪解けを待って先ず道路から始め、ある程度別荘開発の目途がついてきてから現在の自動車部の在る所の前、坂の上り詰めた所へ当時としては**HAIKARAな洋式、白亜の事務所**ができ、その真向かいに、**夏季職員の食堂と、住宅、宿舎を兼ねた家**ができて、**其処で退職するまで長年暮らした訳でした**。当初は千が滝で年間其処で生活する者は、**荻原一族**(なつの身内が手伝いとしていた)だけであり、故人義吉は、小学校6年、小諸商業学校5年、計11年間、其処から通ったわけであるが、風雨の目、特に冬の雪の降った日(時は今より雪が多く降った)、其の都度父に背負われて沓掛(中軽)まで送ってもらったり、会社の職員にそりに乗せてもらったりして、通学したとも聞かされている。

私とは九歳年齢が違うわけだが、私も幼少の頃千が滝で育ちました、道路は現在の位置と変わっていないがもっと狭く、別荘も、ぽつりぽつり、茅との原に赤松が、所々に生えてるといった淋しい所でした。夜はフクロウや、むじなの泣き声、遊ぶ子供は一人もいない、たまに郵便配達人がくるだけで、一人で缶殻叩いてよく遊んでいたものだと言われています。私の記憶がその様なものである。其れより10年も前、故人の時代は押して知るべしであつたろうと思う(柳澤建設は早かったが、次に千葉さん伊藤さん依田さん等が常住されるようになったのは、私の小学校6年生ころだったと思う)。

小諸商業学校時代は沓掛駅まで自転車で通った、行きはよいよい(下り道)帰り

は辛い、坂ばかり、さぞ辛かったとおもいます…小諸商業時代は柔道の選手、当時小商は、井出友則(後県警の師範)と言う県下で名を成す大選手かおり、彼が大將、故人が中堅、当時の中学全国大会、制覇を果たす意気込みで、其れを目指して、血の小使が出るほど練習に励んだという(骨を拾ったとき骨の太くしっかりしていたのにはおどろいた)。(此の無理が後に東京へ出たとき体を壊し、以後永い療養生活を余儀なくされる原因ともなる)

国土、当時の箱根土地株式会社とは、荻原は歴史的関係もあり、祖父としては自分の生涯務めてきた会社でもあり、又自分が今まで培ってきた別荘人との交流、信頼、そして又、生活上の基盤もある、倅義吉は当然この会社に勤めさせるつもりでいた、また其の為に育てて来た筈だ。ところが本人は祖父の意に反して日立製作所に入社してしまった。当時の小諸商業学校は地方では有名な中等学校であり、中でも当時の日立へ入社などとはエリート中のエリートであり、おおいなる誇りでもあった。

(当時の会社(箱根土地)が現在の発展あるを、誰が予想し得たであろうか、余りに身近に観ていて内容を知り過ぎていたこともあったろうか…?、祖父の言うことは関かなかつた、潔は辛かつたろうが義吉には誠に甘かつた。…自分の思いを通すことはできなかった)

日立入社時は、社内運動会でマラソン、一位入賞、精勸賞授与、特別賞与を賞う等自慢し、張り切って勤めていたが、間もなく体を壊し(肺結核)…、**正に青雲の志果たす事ならず、…故郷に帰る……**。永い療養生活にはいる事となる…

祖父の心痛、並のものでなく、これが良いと言えばこれ、あれが良いといえばあれ、エボタの虫、ホトギス等なんでも良いと言うものは、求めて飲ましたり、転地療養に草津、万座へと心血を注がれた。甲斐あって徐々に快方に向かい、きつい仕事は無理であったが、偶々体慣らしに、追分小学校で、先生でもしてみたらとの話があり、鞭を執ることとなる。…そもそもこれが生涯教員となるきっかけとなるわけで、発地、軽井沢、と続ける中、東京の教員養成所で学び、高校の教師となる。(小学校当事教わったという人が、義ちゃん先生が放課後掃除の終わった後、ポケットからキャラメルの箱を取り出し、其れを分けて賞って食べた思い出は忘れられないと言っていた、…私はハハン、兄貴の野郎、店の棚からキャラメル、ポッケ、に入れてって子供のご機嫌とったな?……自分らの小学校時代は、一粒のキャラメルでも賞重な時代であった。…祖父潔もこの頃より箱根土地務めを、させる望みは諦めた…。

寛治の子喬茂が会社(箱根)人となって一様落ちついたこともある…。

勤めた高校は進学校でなく小商、軽高、二校とも就職校であり、特に不況時等は

就職難、ふろ式包みを抱え、手弁当、東奔西走地元は勿論、東京等まで同窓の同僚先輩を頼りに生徒の就職活動をした、幸い小諸商業の同窓生には、要職に就いている人が多く、それらの人々のお陰で成果をあげられたという、問題児を出さないというわけにはいかなかった。其の指導担当を受け補導の任にあたったが、故人は外見はそんなにゴツくは見えなかったが、柔道の後ろ盾でもあるまいが、どんな生徒でも従順であり、言う事を聞いてくれたという。高校の教え子が、試験中カンニングをしようしていた、其の時「点数が欲しければいくらでも付けてやる、だが…そんな事は社会に出ては通用しない、詰まらんことだ」と諭したと言う、決して怒らなかった…、義チャン先生、義吉先生などと慕われ、人気はすごかった。

戦後の大変な時であり家庭の都合で、止む無く退学しなければならない生徒等もあり、それらの生徒には、親身になって相談のり、頑張るよう励ましたり、時には授業料等立て替えて払ってくれた生徒もあったと聞いている

私が兄貴と一緒によそへ出かけると、そこら中で「おい…」なんて気安く一声をかける…教え子だと言う。相手も何処からともかく「先生」なんて大きな声で気軽に話し掛けてくる…、素晴らしい人間関係を待っていた、羨ましい限りだった。

今日は小学校の生徒達の同級会だ、明日は高校のだと、同級会に招待を受けた。よく経済が持つなあ、と、他人事でも心配したことがある。併し多くの人に愛された。…教員冥利に尽きるというものであろう。人としてこの世に生を受けこんな幸せな事はない。

山が好きで春はタラの目、秋はきのこ良く取りに行った、山歩きは早くよくそこらじゅう飛び回ったが、…収穫量はいまひとつ？、と言ったところ、そして小用を小まめに足してくれた。

まさか、この人が呆けるとは、(人権上禁句とされていて認知症と言はなければならないが)…。

敢えて呆け、=惚け、この言葉を使わなければ…、抱えた家族のみの知る苦痛、心痛は表せない。

よく年老いた人に二度ぼこと言う言葉がある、老いて幼児に帰ること…厚子君にママ、ママ、と恰も幼児が母親の後を追う、正に其の姿そのものであった。

厚子君の優しく尽くしてくれた賜物であったわけです。人の縁などと言うものは、ひとつの出会いから始まると言われているが、良き人との出会いであったと思うと共に、こんな人を育てて下さった松原の皆様に、故人の親族として心から感謝申し上げなければならない…。最後の最後を親族に見守られて、息を引き取った本当に幸せな故人であった…。容態が急変して医師に来てもらう…。

心拍数ですか?器械にでてくる数値…だんだん下がって行く…遂に完全ゼロとなる、…私達素人目にも、ああ、これで終わりだ…医師も正に死の宣告を成さんとし

た時「オジイチャン・オジイチャン・シッカリシテ」。厚子君の呼びかけに。・其の数値がみるみる内に、平常の状態に戻った。その場に居合わせた私共の驚き。・正に神秘的な感動でした。・最後のお別れの……。

シグナル……世話になった厚子君への、お礼の・意志表示……であったと信じています。

国で如何なる福祉制度を立派に整備充実して下さっても、家族の暖かい愛に勝るものはなく、其の愛に包まれ最後の最後までそげて看取られて、生涯を全うすることが出来た事は無上の人生であった。

呆けて身体の自由も利かず只病院のベッドに横たわっている入院中、教え子が車椅子に乗せ病院内を散歩、お子守りしてくれたと言う、・其の美談、・正にドラマである。

故人は千が滝の誕生から今日までの成長の歴史と共に歩んで、そして、それを語れる最後の生き証人であった。

故人義古は晩年千が滝の衰退して行くのを嘆いておったが・、成長過程、最盛期時代、戦争による挫折、戦中戦後、そして今日と、80有余年己が肌で見つめてきた千が滝である……最盛期は昭和10年、11、12年頃であり、野菜、肉、魚、雑貨、それぞれの商店が夏期出張店をだし店舗街を形成し、又、大理石の門柱にステンドガラスを使った温泉(沸かし湯、煙草やで湯札を売っていた)、音楽堂での映画会等—隆盛を極めた一緑の中に聳える白亜の、モダンなグリーンホテル……、草津温泉、鬼押し出し行きのバスは鈴なり・、乗馬ズボンに長靴のいでから・、女車掌の粋な姿……。

山の手、東区、果ては西区大回り、とんでもない所まで別荘が建ち、巡回バスが通った。

当時の別荘客は上流階級の人々で、買い物は全て配達が多かった。坂道ばかりで自転車での配達、注文取ったり、配達したり、商人は大変な事であり大勢の店員を置いて対応した。タバコやでも主にみやげものであったが、二三人雇って商いをし、時にはガソリンまで販売した。東区へ出張店を出していた事も有った。夏1ヶ月だけ・、其れで一年中食べる商いをする・、物価の高いのは当たり前・、別荘客も当然の事と黙認、・それが戦前の軽井沢であった。……事務所近辺や道路わきに植えられた、八重桜が見事に咲き誇った時期もあり。盆には盆踊りを盛大に行い、浴衣姿の別荘客の家族ずれが、下駄の音を響かせてグラウンドに集まって来て、大勢で踊り、且つ楽しんだ……。そんな時代もあったのかと思われる程だったが、もし戦争が起こらなかつたら、どのように発展をしていったらうか？

永い戦争、疎開等にも利用された事もあったが冬季は、何せ厳寒の地、加えて夏向きの家屋、大変な思いをされたことだろう。敗戦後は住む人も無く荒れるがま

ま、持ち主も戦災で亡くなったり、・・別荘どころではなく、建物も朽ち果ててしまい、当時は再び現在の様な時代が訪れようとは、誰も思いもしなかった。

併しスケート場建設による画期的な訪客、別荘の復活、大きな社員寮等の誘致で新たな時代を迎え、其れに即応し、活気を呈して来たものの、嘗ての賑わいには及ばない。時代の変遷で其のときの景気、環境の変化、立地条件等により、リゾート・・・レジャー産業なるものほど、常に変わって行くものはないことであり、いたし方のないことと思うが。・・今レジャー関係の主力は皆南へ移って行ってしまった。特に昔賑わった中心的位置にあった、中区が空洞化している。昔を知ってる故人にとっては、何より寂しいことであつたろうと思う。

若し自分か祖父の意思に従い国土(箱根土地)に勤めていたら・・・そんな事が心の片隅をよぎる事があつたかと思う、従兄弟である喬茂兄とは他の兄弟とは違って、何か、ライバル意識のようなものを、持っていたようにも感じられた。

喬茂としては兄貴分であるものの、義吉には色々弱みを押さえられており(親戚に当たる中込の家の娘と見合いした時、其のお供役を義告がしていて、そのときの失敗した喬戚の行状の一部始終を観られている。親の死に目にも会えず住所不定、義告が、やっと探し当て尋ねた時土間にたったの樽ひとつ、何の商売しているのか、照れ臭そうな顔してた)、兄貴分としては振舞えない、双方でライバル的意識を持っていたと思う・・・併し振り返れば片や万座天皇、荻原の面目を施してくれた、片や大先生で生徒に慕われ大往生した。お互い悔いところはない、泉下でしっかり手お握りお互い労を称えあつて欲しいものだ。